

コロナ禍における 幼児教育学科の学びに関する一考察

—学生へのアンケート調査を通じて—

五十嵐 紗 織

1. はじめに

2019年12月末に公式に認知された新型コロナウイルスは、発生から1年近くたった現在も勢力を弱めることなく、日本を含む世界中で被害を拡大させている。まず、世界を不安と恐怖の渦に巻き込んだこの疫病とそれに対する我々の社会の変遷について、今一度振り返ってみたい。中国湖北省武漢地方の市民が発症した原因不明の肺炎のような症状に端を発するこの病気の発生源については、当初はハクビシンが疑われていたが、今ではキクガシラコウモリが自然宿主であると考えられている。しかし、コウモリからどのような動物を介して人間へ感染したかというルートは、未だ謎に包まれている。発生当初は、中国国内、タイ、韓国、日本などの東アジアを中心とするアジア圏での感染確認がされたため、地域的な感染症かと思われた。しかしその考えを検討する間もなく、中国武漢での患者確認からわずか2ヶ月で新型コロナウイルスの猛威は瞬く間に世界を席卷した。まさしく「地球は丸い、世界は一つ」を体感することになる。われわれ地球人が目指してきたグローバル社会は、皮肉なことに情報や金融だけでなく、「病気」という厄介なものさえも一瞬にして拡散させる社会であったのだ。西田亮介は、このことを「急速かつ広範な感染拡大は、繋がった／繋がりを深めたことを自明視してきた世界を寸断した」¹と指摘している。

WHO（世界保健機関）が2020年1月末に緊急事態宣言を発表した後も、その急速で広域な感染拡大に糸目をつけることができなかった。2月後半にはイタリアなどヨーロッパ各国でも感染者が確認されるようになり、3月に入る

とその数は日増しに多くなっていった。3月11日にはWHOのテドロス事務局長が定例記者会見の中で、新型コロナウイルス感染拡大の様相を「パンデミック」であると宣言し、世界的な流行が見られるという認識を示した。

そのような世界情勢の報道を目の当たりにし、さらに日増しに高まる国内での感染拡大、流行への不安の中、2月28日に発表されたのが全国の学校の一斉休校の速報だった。この大規模で早急に求められた一斉休校は、共感と不満と戸惑いという様々な反応の中で実施された。西田はこの措置について、「大きな批判と小さな賛同を呼んだ」²と評している。なお、ここでいう「学校」には大学は含まれなかった。そもそも、学校教育法（昭和22年）の第1条には、「この法律で、学校とは、小学校、中学校、高等学校、大学、盲学校、聾学校、養護学校及び幼稚園とする」と掲げられており、一条校とも呼ばれている。この条文に基づけば大学が含まれていないことに若干の違和感を抱えざるを得なかった。ただし、休校の時期が3月上旬からであったことを考えれば、多くの大学がすでに令和元年度の授業や試験を終え、春期休業に入っていることが予想されるための判断だと想像がつく。そのため、日本における一斉休校の騒動の議論の端緒に大学は加わることができなかった。当初は春休みの期間とされていた一斉休校が一斉解除の宣言を経ぬまま、新年度への突入を余儀なくされた。通常であれば、期待に胸を膨らませた初々しい新入生を迎えるはずだった4月の大学の様相は、例年と全く異なる風景になった。一斉休校の範囲から外れていた大学であったが、結局はその他の“学校”同様の措置を取ることになり、その多くが通常の授業を開始することができなかった。厚生労働省が発表した「新しい生活様式」に基づいた生活を求められた社会は、大学での学びも新しいスタイルに変換することを求めたのである。オンライン〇〇、リモート〇〇と呼ばれるような社会生活が急速に進んだことを受け、大学の在り方もそれに対応することになった。なお、本論でいう「オンライン授業」とは、インターネット回線を使用した授業・学習方法のことで、「同期型授業」（リアルタイムの同時双方向型授業の方法）と、「オンデマンド型授業」（動画や資料を作

成し、そのファイルをインターネットにアップすることで学生の都合の良い時間に学習する方法)の二つの総称として用いる。

2. Classroom を活用したオンライン授業

幸いにも本学周辺の地域では感染拡大の第一波が押し寄せていなかったため、細心の注意を払い、対面授業を基本として令和2年度の授業が開始された。それでも、身体的接触や用具の共有などの面への配慮から、音楽や体育の授業は休講になり、感染拡大地域から通勤する非常勤講師の授業は同期型授業になった。先行き不透明のまま始まった新年度であったが、何とかスタートを切ることができたことに一安心したのもつかの間、4月7日からの緊急事態宣言を受けてわずか一週間で休校になった。1年生にとっては、大学での学びを確立させる大事な時期に、大学での学びができないという事態になった。2年生にしてみれば、保育所や幼稚園の実習に向けた準備と就職活動の本格化する時期に当たり、将来への不安を抱える学生が多く見られた。

感染拡大地域や遠方からの学生を受け入れている多くの大学では、新年度からのオンライン授業を余儀なくされた。しかしオンライン授業を実施することは、「直接的に」「体験的に」「関わりを持って」「相手に寄り添って」学ぶことが大原則の幼児教育学科にとって、学習の根幹を揺るがす大きな問題であった。コロナ禍の幼児教育学科の在り方について、いかにして教えるかという使命が我々教員に突き付けられた。近づかず、話さず、触れ合わない生活の中で、幼児教育学科の授業はどこに向かうのか、どうあるべきなのかという問いに直面することになった。とはいえ、どこの教育機関も同様、いかなる社会情勢であったとしても学生の学びの停滞は許されない。加えて本学のような短期大学では、学生生活の時間に非常に限りがある。

そこで本学では、Google が教育用に開発したウェブサービス Google Classroom を中心に活用し、コロナ禍の学びを進めることにした。Google は企業向けに有料のネットワークシステムである G suite を提供しているが、G

Suite for Education は教育機関であれば無料で使用でき、Google が提供する非常に多くのツールと連動させながら使用できるところにその利点がある。本学では、その中の Classroom や Google Meet、Google フォーム等を活用することで、学生の学びの一助となるよう努めた。Classroom は多彩なツールとの連携に長けており、学生への連絡や情報の共有、資料の提示や学生相互のインターネット上での話し合い等の様々な使い方が可能である。まさに、インターネット上でクラス運営ができるウェブサービスなのである。

本学幼児教育学科の授業としては、Google Meet を使った同期型授業、同じく Google Meet 等で動画を録画して視聴できるようにしたオンデマンド型授業、Classroom 上に資料などをアップしそれを中心に学習する方法、動画を YouTube で公開（限定付き）する方法などによって指導を行った。Classroom は特に、オンデマンド型のオンライン授業への利用に優れている。上述したように動画をあらかじめ撮影したものをアップして課題として視聴させる方法、Google フォームであらかじめ学生への質問を準備しておきそこに解答させる方法、スプレッドシートなどに学生に入力させて解答を返信させる方法、PDF ファイル等の資料をアップしておき学生がプリントアウトした上で手書きして写真に撮って返信させる方法、学生同士がインターネット上で一つの課題や作品に共通で取り組む方法など様々な利用方法がある。ただし、使用においては学生のパソコン環境への配慮が必要である。本学のオンライン授業開始前の調査では、パソコンより画面の小さいスマートフォンやタブレット端末のみで学習をしている学生やプリンターを所有していない学生も多いことが分かっている。文字の大きさや課題の内容、提出方法に工夫が求められる。

Classroom は、対面授業の補完としての活用方法だけでなく、学生や生徒の学習支援全般に役立つツールである³。この活用には、すでに東北大学などでの実践が示されており、大学でのオンライン授業に十分対応できる IT リソース（資源）であることが示されている⁴。コロナ禍において急速に進んだオンライン授業は、教育機関への混乱を招くとともに、教育方法の見直しの検討と

いう表裏一体の関係にあった。Classroomに限らず、ZoomやSkype等を使用した大学におけるオンライン授業の様々な実践、その学習効果の検討は今後様々な場面で検討されていくことだろう。例えば、東洋大学の現代社会総合研究所は、ICT教育研究プロジェクトで、15大学ののべ3,191人の学生（1,426件の回収）に対し、「コロナ禍対応のオンライン講義に関する学生意識調査」（2020年度）を実施している⁵。

本研究では、幼児教育学科の学生のコロナ禍のオンライン授業の取り組みについて、学生の意識や学習効果、学習上の課題について明らかにすることを目的とする。そして、そこで得た知見をもとに、今後の学生指導に対して求められる支援について検討を行う。

3. 研究方法

（1）調査方法

無記名自記式の質問紙調査で、選択または自由記述欄に記入してもらった。対象者は2020年度前期に在籍していた幼児教育学科の1年生51名、2年生35名。

（2）調査の手続き及び調査機関

調査期間は2020年8月から9月である。調査に先立ち、幼児教育学科の教員に調査の許可を得た。学生に対しては、調査によって今後の学校生活や指導に支障が出ることがないこと、結果は統計的に適切に処理し、個人が特定されることがないことなどを説明し、学籍番号や氏名等個人を特定させる情報を収集しないことを確約した上で実施した。

（3）調査項目

学生に対する質問紙調査の質問項目は以下のとおりである。なお、本学は共学ではあるが男女比に偏りがあり、質問項目に加えると個人を特定される

可能性があるため、性別は問わなかった。①～⑮の質問には、＜非常にあてはまる・たいていあてはまる・あまりあてはまらない・全くあてはまらない＞の４段階の尺度を用い、質問項目ごと当てはまる選択肢一つに○を付けてもらった。

【質問項目】

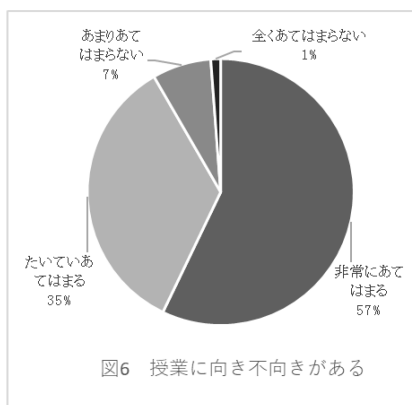
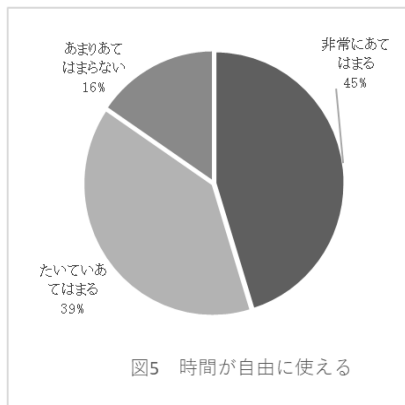
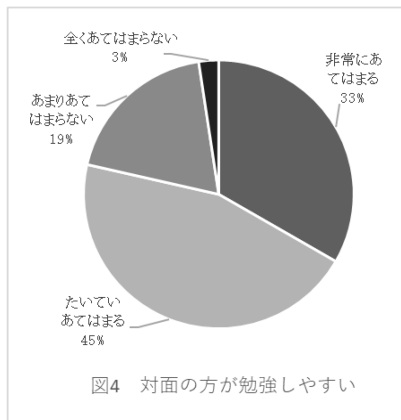
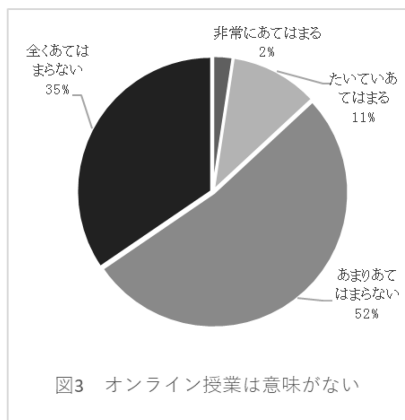
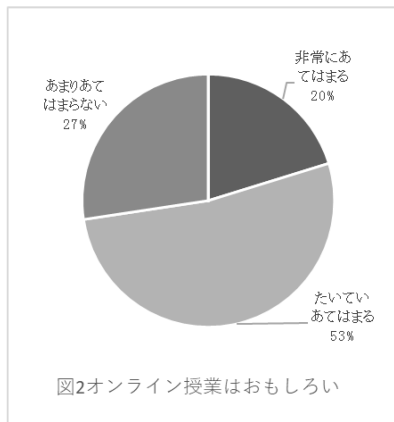
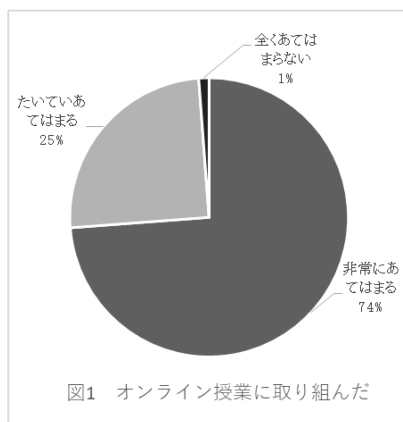
- ①オンライン授業に取り組んだ
- ②オンライン授業はおもしろい
- ③オンライン授業は意味がないと思う（反転項目）
- ④対面での授業の方が勉強しやすい
- ⑤自分の時間が自由に使えてよかった
- ⑥オンライン授業に向く授業とそうでない授業があると思う
- ⑦コロナの感染拡大に関して、学校の再開に不安があった
- ⑧オンライン授業は復習に活用できる点が良いと思う
- ⑨大学の授業にはオンライン授業は向かないと思う
- ⑩友達と一緒に学ぶなら、オンライン授業も楽しいと思う
- ⑪オンライン授業をもっと活用してほしい
- ⑫オンライン授業では集中できないことがある（反転項目）
- ⑬オンライン授業によって授業が進んでよかった
- ⑭今の社会情勢だからオンライン授業も仕方ないと思う
- ⑮感染拡大地域のように、前期全てがオンライン授業でもよかったと思う
- ⑯自由記述

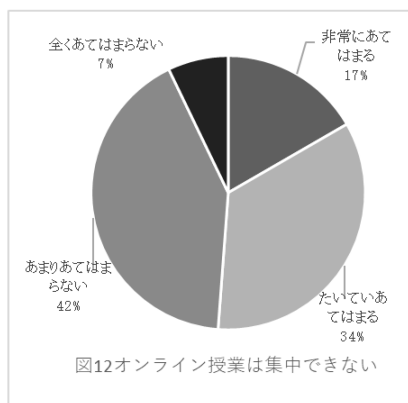
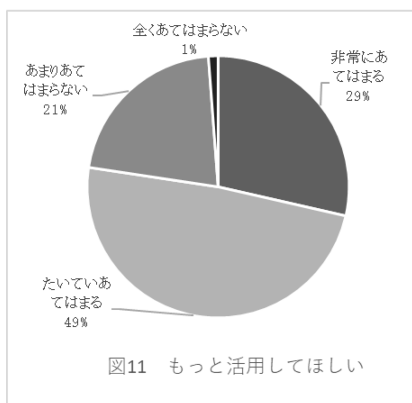
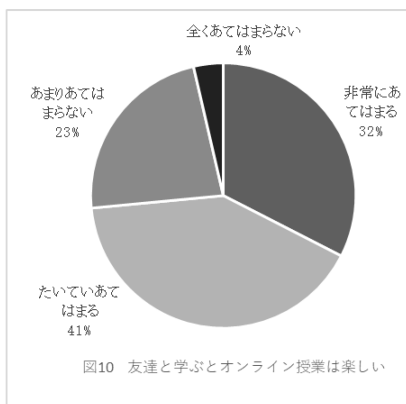
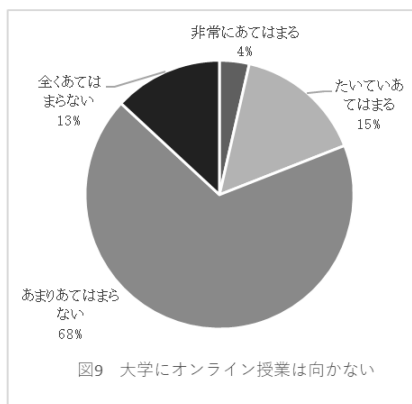
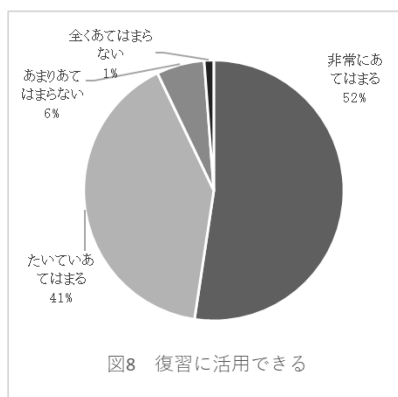
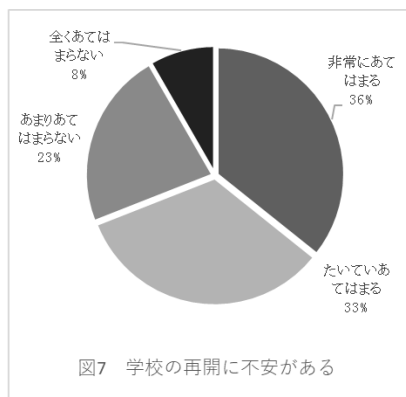
4. 結果と考察

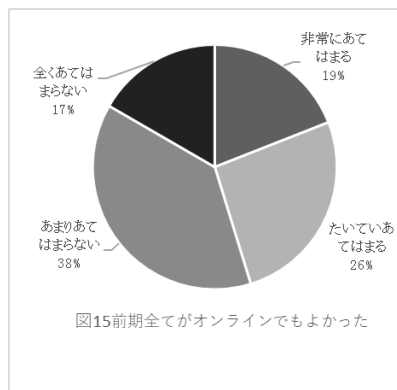
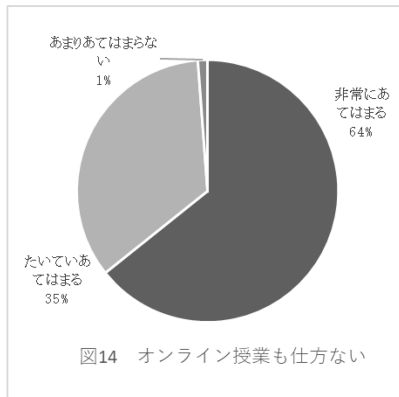
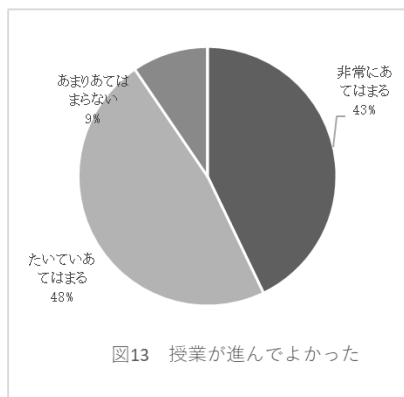
学生への質問紙の回収率は１年生 51 枚（100%）、２年生 33 枚（94%）。全学年合わせた結果は、図 1 ～ 15 のグラフに、学年別のデータは図 16（１年生）、図 17（２年生）に示した通りである。

(1) 全体の結果と特徴 (図1~15)

オンライン授業への取り組みは99%にのぼった(図1)。オンライン授業は楽しいと答えた学生は非常にあてはまる・たいていあてはまるを合わせて73%だった(図2)。オンライン授業は意味がないと答えた学生は13%にとどまり、多くの学生は一定の意義を理解していた(図3)。対面授業の方が勉強しやすいという問いには4分の3以上の学生が非常にあてはまる・たいていあてはまると答えた(図4)。時間の活用しやすさについては80%以上の学生が非常にあてはまる・たいていあてはまると答えた(図5)。オンライン授業に向く授業と向かない授業があるという問いには、9割以上が非常にあてはまる・たいていあてはまると答えた(図6)。コロナ禍の学校再開については、7割の学生が不安を抱いていた一方、3割の学生はあまりあてはまらない・全くあてはまらなと答えた(図7)。オンライン授業の学習効果として、9割の学生が復習に活用できるとした(図8)。大学の授業にオンライン授業は向かないと答えた学生は2割弱で、一定の評価は示されたといえる(図9)。友達と学ぶのであればオンライン授業も楽しいと答えた学生は7割に上り、オンデマンド型授業の在り方について工夫が求められることが示された(図10)。オンライン授業をもっと活用してほしいという問いには、8割近い学生が非常にあてはまる・たいていあてはまると答えた(図11)。オンライン授業への集中力の持続については、あてはまるとあてはまらないが約半々だった(図12)。オンライン授業によって授業が進んだことに9割以上の学生が肯定的な答えだった(図13)。社会的な情勢を受けてオンライン授業でも仕方ないという問いには99%の学生が非常にあてはまる・たいていあてはまると答えた(図14)。前期の授業がすべてオンライン授業で行われてもよかったと答えた学生は45%、あまりあてはまらない・全くあてはまらなと答えた学生は55%と僅差だった(図15)。







(2) 1年生の結果と特徴 (図16)

質問① 1年生のオンライン授業の取り組み率は100%（取り組んだ42名・82.4%。ややとりくんだ9名・17.6%）であった。②「オンライン授業はおもしろい」という問いには、非常にあてはまるが13名・25.5%、たいていあてはまるが26名・51.0%と、おもしろいと答えた学生は4分の3に上る。一方、あまりあてはまらないと回答したが学生も23.5%おり、授業の内容に対する課題も浮かんた。③「オンライン授業には意味はない」という反転項目に対しては、あまりあてはまらない・全くあてはまらないの回答者を合わ

せると 86.2%に上り、一定の効果があったという評価を得た。④「対面授業の方が勉強しやすい」という問いには、非常にあてはまる・たいていあてはまるが 40 名・78.4%を占め、4 分の 3 に上った。対面の授業との比較においては、オンライン授業に対する学生の評価は低かった。⑤「自分の時間が自由に使えてよかった」については、45 名・88.3%の学生が非常にあてはまる・たいていあてはまると答えた。恐らく同期型の授業ではなく、オンデマンド型の授業の受講に対する時間の自由度が評価されていることが示されているとみられる。⑥「オンライン授業に向く授業とそうでない授業がある」という問いには、46 名・90.2%の高ポイントで非常にあてはまる・たいていあてはまるという回答であり、授業をいかに構成していくかという教員側への手掛かりになろう。⑦「大学の再開への不安」については、非常にあてはまるという学生が約 4 割に上り、学習面だけでなく学生の心理面への配慮が必要とされていたことが示されている。⑧「オンライン授業の復習への有効性」については、非常にあてはまる・たいていあてはまるを選んだ学生が 48 名・94.1%に上り、録画機能やオンデマンド型を活用することで、学習効果を高める可能性がある。⑨「大学にはオンライン授業は向かない」という反転項目については、43 名・84.3%の学生があまりあてはまらない・全くあてはまらないと答え、一定の役割があることを示している。⑩「友達と一緒に学ぶなら、オンライン授業も楽しい」という問いは概ね高い評価だった一方、11 名・21.5%の学生があまりあてはまらない及び全くあてはまらないと答えている。オンライン授業に伴う学生の孤独感を補う手立てが必要になることが示されている。⑪「オンライン授業への活用の期待」は、全くあてはまらない以外の項目に分散が見られ、意見が割れていた。⑫「オンライン授業は集中できないことがある」については、非常にあてはまる・たいていあてはまるを選んだ学生が 25 名・49.0%、あまりあてはまらない・全くあてはまららないを選んだ学生は 26 名・50.9%と五分五分になっており、学生の学ぶ環境が影響していることが考えられる。⑬「オンライン授業によって授業

が進んでよかった」の問いには 95% 以上の学生が非常にあてはまる・たいていあてはまると答えており、休校中の代替え措置としての評価を得た。⑭「社会情勢を受けてオンライン授業は仕方ない」については、回答者全員が非常にあてはまる・たいていあてはまるを選んだ。⑮「前期の全ての授業がオンライン授業でもよかった」という問いでは、32 名・62.7% の学生が否定的な意見を選んでいるため、対面授業を優先した本学の取り組みに評価があったと思われる。

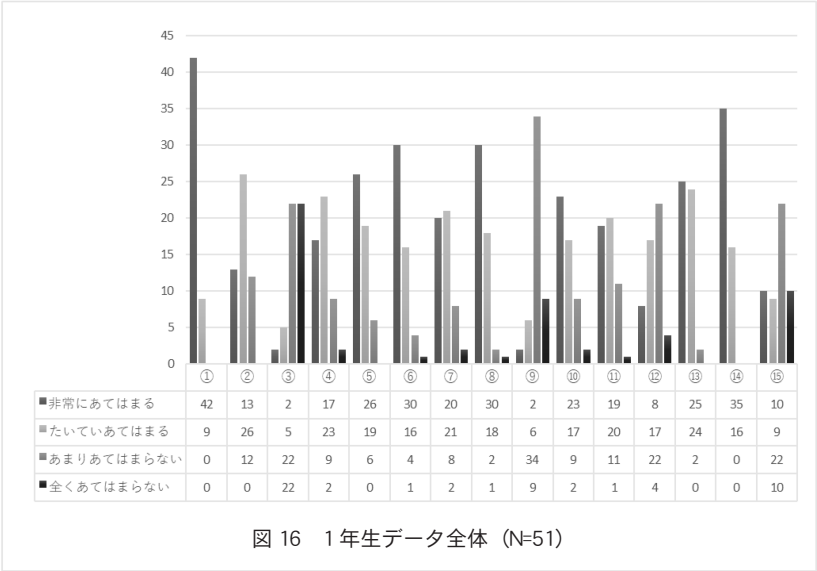


図 16 1 年生データ全体 (N=51)

(3) 2 年生の結果と特徴 (図 17)

質問①の「オンライン授業への取り組み」は、1 名を除いて取り組んでいた。②「オンライン授業は面白い」という問いについては、たいていあてはまるが 18 名・54.5%、あまりあてはまらないが 11 名・33.3% と評価は拮抗している。③「オンライン授業は意味がない」は、29 名・87.9% の学生があまりあてはまらない・全くあてはまらないを選び、オンライン授業へ

の意義を感じている。④「対面授業の方が勉強しやすい」と、⑤「自分の時間が自由になってよかった」は、非常にあてはまる・たいていあてはまるを選んだ人数が26名・78.8%と、同じポイントだった。オンライン授業よりも対面授業の方がよいと答えた学生が多い一方、同じ程度の学生がオンライン授業の特にオンデマンド型授業によって時間が自由に使えることを評価しているという結果だった。⑥「オンライン授業に向く授業とそうでない授業がある」という問いには31名・9割以上が非常にあてはまる・たいていあてはまると答え、1年生同様に科目による向き不向きを学生が感じていることが示された。⑦「コロナ禍の学校再開への不安」は不安に感じた学生と、感じていない学生がほぼ半々であり、感染症対策等への一定の評価が見られた。⑧「オンライン授業は復習の活用に有効」の質問には、9割以上の学生が非常にあてはまる・たいていあてはまると回答した。Classroomによるオンデマンド授業の効果が期待できる結果であった。⑨「大学の授業にはオンライン授業は向かない」には、約4分の1の学生が向かないと答え、授業の提供方法などに課題を残した。⑩「友達と一緒に学ぶならオンライン授業も楽しい」という問いには、21名・63.6%の学生が非常にあてはまる・たいていあてはまると答え、オンデマンド型だけでなく同期型授業やチャット機能などの活用が望まれているといえる。⑪「オンライン授業をもっと活用してほしい」には、8割近くが非常にあてはまる・たいていあてはまると答えた。⑫「オンライン授業では集中できないことがある」という質問には、はいといいえが約半々であり、学びの環境や学生自身の意欲などに影響を受けているとみられる。⑬「オンライン授業によって授業が進んでよかった」については、27名・81.8%が非常にあてはまる・たいていあてはまると答え、学生の学びの持続に大きな役割を果たしたといえる。⑭「社会情勢を受けてオンライン授業も仕方ない」という問いには、9割以上が賛同の意見であり、おおむね好評を得ていたことが示された。⑮「感染拡大地域のように前期の授業全てがオンライン授業でもよかった」については、非常にあてはまる・

たいていあてはまるを選んだ学生が 18 名・57.6%でやや多く、オンライン授業への評価とともに授業の連続性を求めていることが明らかとなった。

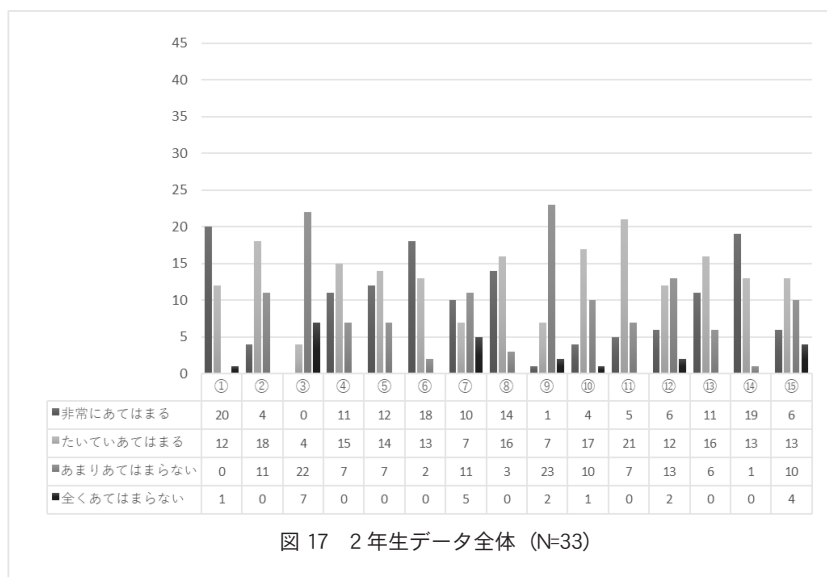


図 17 2 年生データ全体 (N=33)

(4) 学年の意識の差異 (表 1)

続いて、学年による意識の差異を見ていく。非常にあてはまる及びたいていあてはまるを「はい」(賛成的意見)、あまりあてはまらない及び全くあてはまらないを「いいえ」(反対的意见)として直接確率計算を行った。結果は表 1 に示した通りである。

有意差が見られた項目は⑦・⑬・⑮の 3 つである。「新型コロナウイルス感染拡大に対して学校の再開に不安があった」という質問⑦について、偶然確立は $p=0.0055$ (片側検定) であり、有意水準 1% で有意であった。したがって、1 年生の方が 2 年生よりも学校の再開に不安を抱えていたことが明示された。大学への進学をしたばかりの 1 年生にとって、新型コロナウイルスという未知なる疾病予防と学業への両立に対する不安が、2 年生より強かつ

たことがわかった。1年生のほとんどは、3月の一斉休校により高等学校の卒業式が中止や縮小になった。高校生活と十分に別れを告げることができずに、割り切れない気持ちを抱えたまま、進学した学生も少なくない。そんな中、期待を持って進学した大学でも、1週間の対面授業を経てすぐに休校に入ってしまう、友人や教員との関係を築く時間が不足していた。そのため、いざ学校が再開されることになっても、大学への期待感よりも健康面に対する不安感が高かったのだろう。すでに大学生活を1年間送り、友人関係や学習面への見通しがついている2年生は、大学の再開を心待ちにしている学生が1年生よりも多かったと思われる。

質問③「オンライン授業によって授業が進んでよかった」という問いについては、偶然確立は $p=0.0377$ （片側検定）で、有意水準5%で有意であった。1年生の方がオンライン授業によって学習が進んだことを評価していた。大学での授業が全くストップしてしまうことへの不安は、就職活動や卒業を控えた2年生ではなく、1年生の方が高かった。2年生が学校生活に慣れていた分、学習に見通しを持っていたことが示唆された。

質問⑤「感染拡大地域のように、前期全てがオンライン授業でもよかった」という質問では、偶然確立は $p=0.0544$ （片側検定）で、有意傾向が示された。2年生の方が1年生に比べ、前期の全ての授業がオンラインで実施されることへの肯定的な意見が多かった。2年生は、レポート等の課題の取り組みにも慣れ、自宅で個別に学習を進めていくことが1年生以上に可能であっただろう。さらに、就職活動等に時間を活用するためにも、授業が先延ばしになるよりは、オンライン授業で進んでいくことに前向きな意見が1年生よりも多かったといえる。

以上の結果から、1年生の方が新型コロナウイルス感染拡大の終息が見えない中での学校の再開と今後の授業の進度に不安を抱え、対面授業の代替えとしてのオンライン授業を評価していた。その一方、授業は対面が基本という概念が強く、オンライン授業はあくまでも一時的な措置で、学校が再開さ

れた以降は対面授業を望んでいたことがわかった。1年生は、終わりの見えない休校と自粛疲れの中、今後の大学生活を不安視していたことが示唆された。2年生については、社会情勢による変化に対応することよりも、一貫した学習時間の確保に重きがあったといえる。

表 1 学年による意識の差異

質問	1 年 (N=51)		2 年 (N=33)		偶然確立 (片側)	有意差
	はい	いいえ	はい	いいえ		
①	51	0	32	1	p=0.3929	ns (.10<p)
②	39	12	22	11	p=0.2307	ns (.10<p)
③	7	44	4	29	p=0.5539	ns (.10<p)
④	40	11	26	7	p=0.5961	ns (.10<p)
⑤	45	6	26	7	p=0.1940	ns (.10<p)
⑥	46	5	31	2	p=0.4306	ns (.10<p)
⑦	41	10	17	16	p=0.0055	** (p<.01)
⑧	48	3	30	3	p=0.4404	ns (.10<p)
⑨	8	43	8	25	p=0.2431	ns (.10<p)
⑩	40	11	21	11	p=0.1513	ns (.10<p)
⑪	39	12	26	7	p=0.5119	ns (.10<p)
⑫	25	26	18	15	p=0.3933	ns (.10<p)
⑬	49	2	27	6	p=0.0377	* (p<.05)
⑭	51	0	32	1	p=0.3929	ns (.10<p)
⑮	19	32	19	14	p=0.0544	+ (.05<p<.10)

n.s.: not significant (非有意)

(5) 調査結果の概要と考察

以上の結果より、コロナ禍でのオンライン授業に一定の評価がされ、その中でも特にオンデマンド型授業の復習への活用能力の高さと自分の好きな時

間に学べることが利点であると考えている学生の意識が明らかになった。コロナ禍であるか否かを問わず、大学の学びのスタイルの在り方の一つとして、オンライン授業を含む様々な授業形態の可能性が多岐に広がっていることが示唆された。

その一方、授業の内容によってオンライン授業に向くものと向かないものがあるという明確な差を感じており、対面授業を望む学生も多かった。前出の調査⁶では、教員の負担感と学生の評価の間には相関がないことや、スマートフォンを使った学習者はパソコン利用者に比べて学習時間が少ないことなども明らかにされている。今後、授業者としての教員の意識や準備にかかる負担感、学生の学習環境なども含め、オンライン授業の有効的な活用方法について、さらに検討していく必要がある。

(6) オンライン授業に対する意見（自由記述・一部抜粋）

次に、自由記述から学生の意見を紹介する。紙幅の都合上全ての意見ではないが、上述の質問項目からだけでは汲み上げることが難しかった意見を中心に紹介する。

【1年生】

●対面授業の利点

- ・復習しやすいし、質問を他人に知られないようにできるがそれを共有できないため対面授業の方がいいと思う。
- ・自宅で復習できる点がいいと感じた。ですが、対面授業の方が集中でき、分らないところは質問できるので対面授業の方がいいと感じた。
- ・家だと個人的に集中ができないので、対面の方がやりやすいと思った。
- ・オンラインは必要なことしか話さないで楽しさが無い。

●オンライン授業の利点

- ・通学時間などがいらぬし、見づらくもないからいいと思う。

- ・オンライン授業も、取り扱う内容次第で活用できると思います。
- ・自分の時間を自由に使え、多数でやるより集中できた。
- ・授業では早く書けない所も、オンラインの授業なら自由に時間を使えるので良かった。
- ・分からない所やもう一度復習したいところを自由に戻せるのがありがたかったです。

●オンライン授業の課題

- ・在宅で授業を受ける場合、周囲に音が漏れるので発言しない授業がよい。
- ・オンライン授業や課題の通知が来ないときがあり、慌ててしまうことも少しあった。
- ・機械によって動きが遅かったり読み込まなかったりする点があったり、機械とアプリの相性が悪かった。

●希望・要望

- ・クラスの意見などが見られると自分の意見と比較できると思うので、導入してほしい。

【2年生】

●対面授業の利点

- ・対面の方が集中できるし、オンラインだとやらなければならないことを後回しにしてしまうので向いていないと思った。

●オンライン授業の利点

- ・わからない所は停止して確認することができる。
- ・授業が進んだので良かった。

●オンライン授業の課題

- ・あまり集中することができない。
- ・メールでの課題提出だとわかりにくい。
- ・グループワークができないのは悲しいが、復習などの点ではよいと思った。

- ・評価のために課題が多く出されるのが嫌です。

●希望・要望

- ・わかりやすければ何でもいい。
- ・タブレットやパソコンを配布してほしい。
- ・部分部分で活用するのではなく、オンラインにするのならばすべてをオンラインにしてほしい。
- ・座学に関しては、オンラインでも問題ないと思います。

(7) 自由記述への考察

グラフ・表だけではわからなかった学生の本音が自由記述の中から見いだされ、非常に興味深い。今回は、学生の学習環境やインターネット環境に関する調査を行わず、学習内容に特化して質問をした。学生によっては、一人で静かにオンライン授業を受ける環境が家庭にないため、車の中で受講するしかないと話していた学生もあり、学びの環境をどう整えるかが課題として見える。また、本学では前期授業の一部がオンライン授業となっただけで、基本的には対面授業を行うことができた。もしも長期間にわたって大学への登校が禁止され、オンライン授業が継続するようなことになれば、学費や住居費といった面での意見や問題点も多数噴出したことだろう。対面授業かオンライン授業かという二者択一ではなく、それぞれの持ち味を活かしながら、いかに大学で深い学びを進めるかということをこれから考えていかなければならない。

5. 終わりに

視聴覚教材の始まりは、1660年頃にコメニウスが作成した「世界図絵」だといわれる。「世界図絵」は、文字を読まない人々に取り、「絵」で学ぶということの可能性を示した教授メディアの先駆けである。世界図絵が我々教育界に及ぼした影響は多大であり、今日まで脈絡と続く学校教育の在り方の基盤とな

っている。360 年も以前に生まれた教科書が私たちの教育の道具として根付いているのであれば、インターネットを介したオンライン授業もまた、その世界図絵の流れを汲んだ教授メディアの一つともいえよう。確かに、新しい道具に対する柔軟な取り組みが、我々教員に不足していることは否めない。学生においても、大学の学びは対面授業を基本として、オンライン授業はあくまでも補完的な位置づけという考えから脱却できない者も多い。しかし、このコロナ禍でのオンライン授業の普及は、コロナが収まれば対面授業に戻るというものではなく、様々な学びの在り方について考えていく契機となったと捉えるべきである。新型コロナウイルス感染拡大が収まったとて、もしくは画期的な治療薬やワクチンが我々まで一般的に波及したとて、大学教育が抱える問題として、真っ向から取り組んでいかなければならない。

従来から大学が取り組むべきタスクの一つであったこの課題が、思ったよりも早く我々の身近な問題として目前に迫ってきたというべきなのかもしれない。すでに忘却の彼方に追いやられた過去かもしれないが、大学関係者にとって 2018 年問題は大きな波となるはずだった。日本の近年の 18 歳人口は平成 4 年の 205 万人をピークに、平成 26 年（2018 年）には 118 万人まで減少することが予期され⁷、かつ高等教育機関への進学率は数年伸び悩むという状況を受け、大学経営の悪化が懸念されていた。その当時はメディアなどでも盛んに取り上げられていた。最悪のシナリオは脱したともいわれるが、少子化における大学の状況は好転してはいない。高等教育が一部の特権的な学生に対するものではなく、多くの人が共有して受けることができる義務教育に近いものになっていくとすれば、大学の在り方もこれに準じて変わっていかなければならない。その一つの手立てがオンライン授業だともいえる。この手法を活用すれば世界のどこの大学にも進学は可能となり、働きながら学ぶことやダブルスクールで学ぶこと、経験や年齢を経て科目だけの履修など、大学の在り方・学び方はさらに多様になる。この新型コロナウイルスの流行は、大学教育にとって新たなステージを提供した。今後、どのように学生に学びの楽しさを伝え考え

る力をつけていくのか、対面授業とオンライン授業の共存とともに考えていくことが課題である。

¹ 西田亮介 (2020)『コロナ危機の社会学 感染したのはウイルスか、不安か』, 朝日新聞出版

² 前出 西田亮介

³ 倉掛 崇 (2016)「クラウド型学習支援システム Google Classroom を活用した授業実践」日本教育工学会研究報告集 16(1), 251-254

⁴ 東北大学「オンライン授業 ガイド」<https://olg.cds.tohoku.ac.jp/#h.pynrqbyc567j> (最終アクセス 2021 年 1 月 3 日)

⁵ 東洋大学 現代社会総合研究所 ICT 教育研究プロジェクト「コロナ禍対応のオンライン講義に関する学生意識調査」(2020 年) <https://www.toyo.ac.jp//media/Images/Toyo/research/labocenter/gensha/research/52395/1questionnaire.ashx?la=jaJP&hash=C36CFE9B7AD656C60987AAB3BE92B314052C9E19> (最終アクセス 2021 年 1 月 4 日)

前出 5

⁶ 内閣府「18 歳人口と高等教育機関への進学率等の推移」<https://www8.cao.go.jp/cstp/tyousakai/kihon5/1kai/siryoe-2-7.pdf> (最終アクセス 2020 年 12 月 10 日)

【参考】

- ・ 国立感染症研究所「ヒトに感染するコロナウイルス」<https://www.niid.go.jp/niid/ja/from-idsc/2482-2020-01-10-06-50-40/9303-coronavirus.html> (最終アクセス 2020 年 12 月 14 日)
- ・ 厚生労働省「新型コロナウイルスを想定した「新しい生活様式」の実践例を公表しました」(6 月 19 日一部改正) https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000121431_newlifestyle.html (最終アクセス 2021 年 1 月 3 日)
- ・ 信濃毎日新聞朝刊 2020 年 11 月 28 日「検証 新型コロナ時代 中国から世界へ どう広がったのか」
- ・ J.A. コメニウス作・井ノ口淳三訳 (1995)『世界図絵』平凡社

